

[Japanese Ver.]

2014

The first quarter

Beautiful SIHEUNG



市のシンボル



シンボルマーク

市民の一体感を醸成して始興市の統一、一貫したイメージを伝えようとしており、市を代表する市旗などに使用される。

シンボルマークの意味

左上部分が上へと伸びているのは、目標に向かって絶えず前進する始興市の意志をダイナミックに表現
オレンジの楕円は太陽を表し、西海岸中心の21世紀をリードしながら上昇していく始興市を意味
中央のSをかたどったラインは、始興市のイニシャルである「S」を表すとともに始興市の発達した道路網を意味
ブルーの楕円は黄海と隣接した始興の豊かな自然環境を表現



紋章

始興市の権威と尊厳を表す装飾的な図柄で、市長名義の任命状や表彰状、公務員身分証明書、各種許可証、その他市長が必要と認める文書・施設・物資などに使用される。紋章は鉄印または記章にして使用でき、記章は市の行政に貢献した功績が顕著な者や市を表敬訪問する外国使節団、外国からの貴賓や海外同胞で市と特別な縁故がある者、または市長が特別に必要と認める者に授与される。



キャラクター (トロ&ヘロ)

始興市を個性豊かに表現する要素として市政と市民の架け橋的な役割を担い、親しみやすい市のイメージづくりを図る目的で使用される。

キャラクターの誕生背景と意味

水陸両生の多産動物として豊かさを象徴する「カメ」をモチーフにしており、21世紀における西海岸の中心都市として躍進する始興市のイメージを対内外にアピールする役割を果たす。
キャラクターの名前は「トロとヘロ」で、漢字表記は土路と海路。トロとヘロは始興市の緑地と海を象徴し、自然と共に発展する交通要衝地としての始興を意味。



シンボル生態系 (始興浜溝)

歴史的・生態学的に保全価値のある始興市の代表的な自然景観で、環境保護に対する市民の意識と愛郷心を鼓舞する目的で指定された。

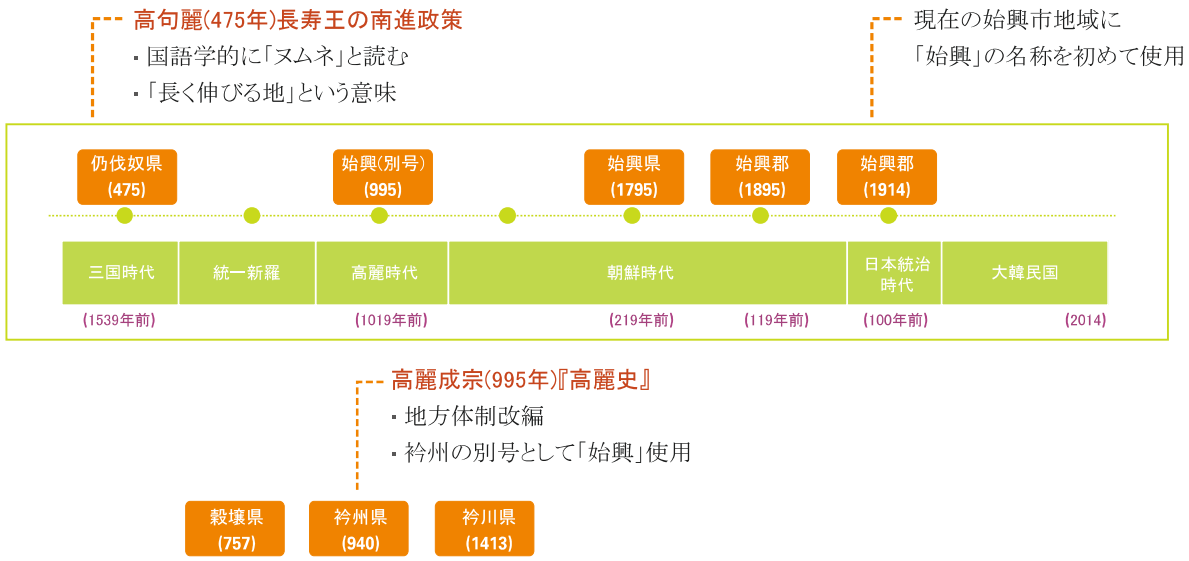
始興浜溝は塩田・干拓地・貝塚など海と関わりの深い始興市の歴史的・地理的特性をよく表しており、環境を保全して自然と人が共生する環境生態都市を築こうとする市民と市政の固い意志が込められている。



始興市米ブランド/ヘットミ

始興市の梅花洞、道倉洞、米山洞、浦洞などの広くて肥沃な大地で栽培された米。これらの農耕地帯は戸曹原(ホジョボル)と呼ばれている。英祖時代に財政担当行政機関の戸曹(ホジョ)がセウゲ(浦洞)と下中洞に700メートルの堤防を築いて作った耕地で、ここで生産された米は戸曹が全量王宮へ持っていったほど品質が優れている。

「始興」の名称変遷史



行政区域改編後、始興に どんな変化が？

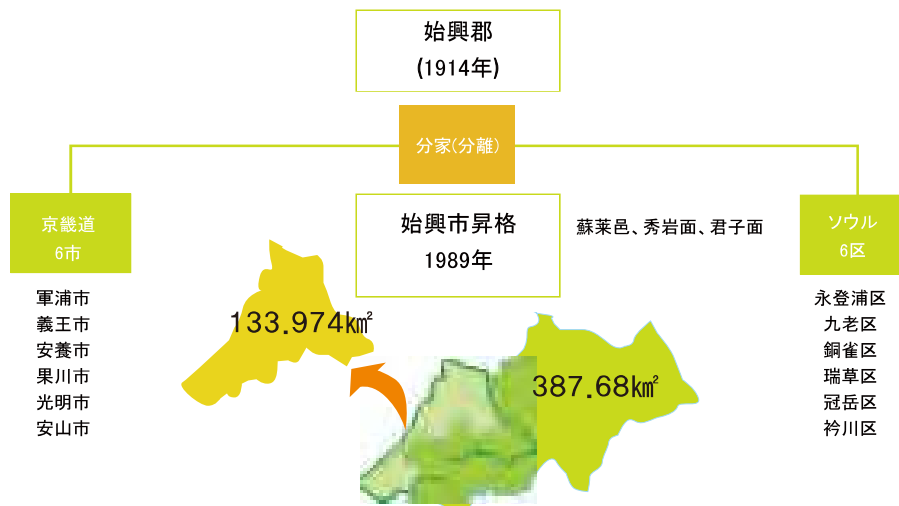
100年の歴史、500万の宗家・始興 — 「始興」の名を守り抜いた100年の歴史

1914年の行政区域改編を起点として始興は9つの面と83の洞・里からなる大きな郡になりました。その後、100年という年月の中で「大郡」始興から京畿道6市とソウル特別市6区が分かれて誕生しました。その中で始興市は最後まで「始興」という名前を守り抜いた500万の宗家です。

始まる「始」、興る「興」
始興(シフン)

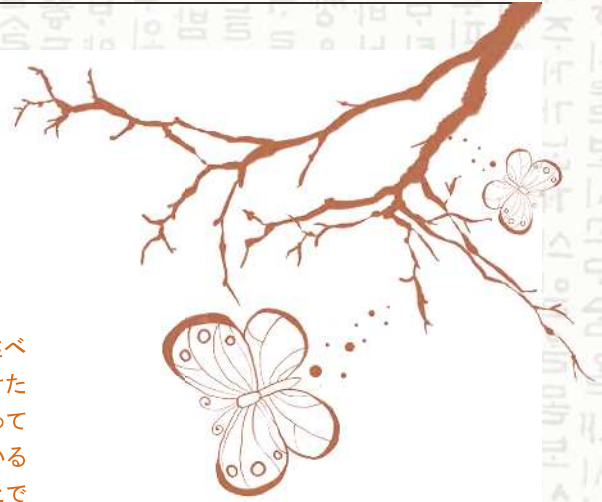
「始興」には新しく興って隆盛する地、時が来て栄え発展する地という意味があります。広大な草原を駆け回った高句麗の気概をそのまま受け継いだ名前が「始興」です。

行政区域改編「始興」



始興100周年、始興の歴史について

歴史学者のエドワード・カー(E.H. Carr)は「歴史とは現在と過去との対話である」と述べた。歴史はただ単に昔の話ではなく、現在との絶え間ない対話によって未来に向けた準備をしていく土台となる。それでは、「始興」の歴史について私たちはどれだけ知っているだろうか。一般的に各地域の地名をよく見れば、その土地と文化的特性がわかると言われている。2014年「始興100周年」を迎えたのを機に、始興の歴史を知った上で共に未来に向けて準備をしていこう。



高句麗の気質がうかがえる「始興」という名前。新しく隆盛する地「始興」は、どのような歴史と背景を経て今まで続いてきたのか。始興の歴史を探れば、「始興」という地名がこの地域にどれだけよく合っているかがわかる。高句麗の長寿王は427年に都を平壤に移し、本格的に領土を南に拡大する政策に乗り出した。早くから百済の影響圏にあった始興市の前身である買召忽里・璋項口泉地域が長寿王475年、高句麗に編入された。その名のように広大な草原を駆け回った高句麗の気質をそのまま受け継いでいる。それでは、今日私たちが使っている始興という名称はいつから登場したのだろうか。『高麗史』によると、高麗成宗14年(995)に高麗の地方体制を10道に整備する中で現在のソウル、京畿、北朝鮮黄海道一帯は関内道に属するようになった。このとき、当時の衿州県(現在のソウル市衿川区一帯)が「始興」という別名を持つようになり、1795年に衿川県が始興県に改称されて正式な地名となった。その後1914年3月1日、行政区域の改編によって現在の始興市が「始興」という名称を使い始め、その縁が100年続いてきた。

首都圏500万の宗家、始興。

1912年まで始興郡の行政区域は6面22洞りで構成されていたが、永登浦を中心に現在の冠岳区、九老区、永登浦区と京畿道光明市、

安養市を包括する地域だった。その後1914年に行政区域の改編が行われ、始興は規模がさらに拡大して9面83洞里からなる非常に大きな郡となった。現在の始興市の南側地域は安山郡に属していたが、このときに秀岩面、君子面に統合されて始興郡に入ってきた。範囲を見れば、今日のソウル南部地域と漢江以南地域までのほとんどを占めるほど面積が非常に広がった。京畿文化財団の発刊した『京畿道の話』には、1914年当時の始興郡について面白い表現がある。「果川の領域がソウルの蚕室まで及び、安山の領域は烏耳島に至るため、ソウルの蚕室駅から2号線電車に乗って舍堂駅で4号線に乗り換え、終点の烏耳島までさらに1時間半かけて行ったとしても、当時の始興郡内から抜け出せなかった」という記述から、始興郡の規模が推し量れる。1970年代にも、再び行政区域に大きな変化が訪れた。1973年に安養邑が分離して市に昇格し、富川郡の廃止に伴って始興市北側地域の蘇葉面が始興郡に編入された。その後も続いた分離によって1981年には所下邑と光明出張所が光明市に、1986年には果川出張所が果川市に、1989年には軍浦邑と義王邑がそれぞれ分離して軍浦市、義王市に昇格し、始興もまた1989年に市に昇格した。この地域は1914年から「始興」という名前との縁が始まり、今日に至っている。

ペゴッ新都市、未来に向けて新たなスタートを切ろうとする始興市は、この地域の歴史を正しく知ることによって堅固な気質と壮大な夢を抱き、これからの100年に向けて準備している。日本統治時代に周時経先生が主導した朝鮮語講習院「ハングルペゴッ」は、暗鬱たる現実を打破するため、教育に答えを見出そうとした。始興もそのような精神に倣うべく、「ハングルペゴッ」の「ペゴッ」をとって「ペゴッ新都市」と名づけた。始興は今、教育・医療クラスター構想を描いて過去の知恵を受容・活用し、未来の価値を創出している。

地域の歩みと歴史を正しく知るということは、その基盤の上でいかなる価値を生み、どのような姿に発展させていくか方向性をはっきりさせるために必要である。また、始興への愛郷心を高めるとともに、住みたいまちづくりにおいても非常に重要なことである。誇るべき始興100周年を迎えた2014年の一年間、市と全市民が共にこれからの始興100年に向けて準備できればと願う。



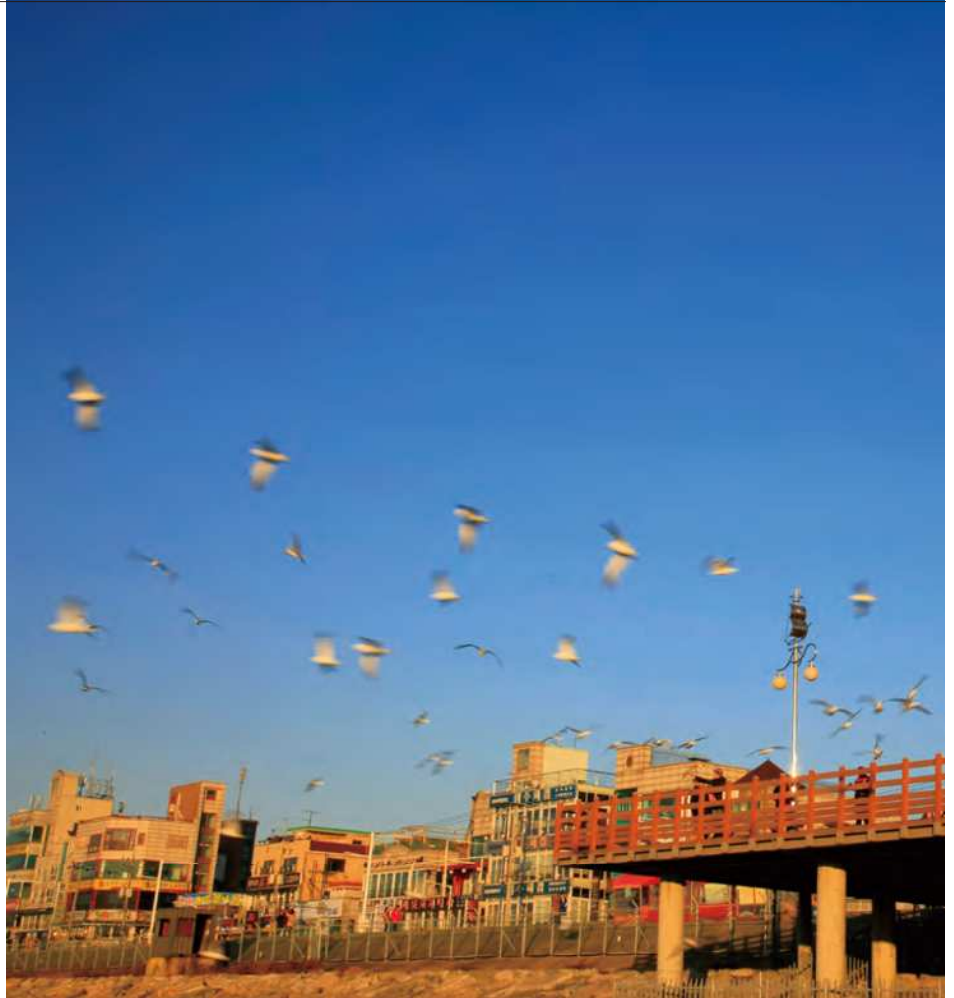
一緒に歩こうか？



鳥耳島の希望

「オーシャンフロント」

鳥耳島に足を踏み入ると真っ先に目につく場所が赤灯台。長い間鳥耳島を訪れる人々の目を引きつけてきた赤灯台は、今やその存在自体が鳥耳島のシンボルになった。しかし、最近オーシャンフロントプロジェクトが始まり、それに伴って鳥耳島を代表する様々なコンテンツが一つ、二つと現れ、赤灯台の座を虎視眈々と狙って訪問客の視線を引きつけている。今回の紀行では、赤灯台に代わって確固たる位置を築きつつある鳥耳島オーシャンフロントの代表的なシンボルをご紹介します。



昔の詩人の散歩道でふれる 詩人の息づかい



鳥耳島オーシャンフロントは、「コウノトリと岩の道」によって鳥耳島干潟の中央へ長く伸びるデッキから始まる。引き潮のときは干潟に息づく生命が観察でき、満ち潮のときは海の真ん中に浮かんでいるような錯覚を起こさせる水上デッキを歩いて楽しめる特色ある場所。

特に、カップルをたくさん見かけるのは、それだけ込み合う散策路から外れてひっそりとデートを楽しめる場所だからだろう。「コウノトリと岩の道」を抜けて堤防の上にてきた散歩道を少し歩くと、間もなく木の形をした作品性に優れる生命の木展望台が見えてくる。みんな写真を撮るのに余念がな

いほど美しく趣のある展望台。特に、夜間は美しい照明を受けて輝く木の形状を浮かび上がらせる。散策路はそれぞれ異なる名前が付いており、昔の詩人の道を過ぎて再び赤灯台を横切り、ずっと歩いていくとまた別の場所にある「夕焼けの歌展望台」にたどり着く。黄海に沈む美しい夕日が眺められる展望台で、カップルの人気スポットとなっている。

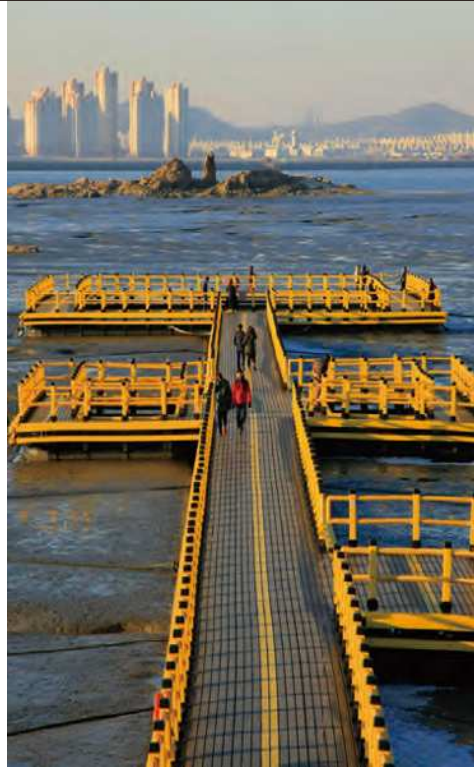
実際は夕日を鑑賞するというより、ツーショットをパシャパシャ撮るカップルのほうがたくさん見られる。夕日よりは愛が優先のようだ…。





ピチピチ跳ねる活魚と 共に楽しむ烏耳島魚市場

特に、烏耳島魚市場は海で捕れたての新鮮な活魚を年中、目で見て選んで食べられ、五感を楽しませてくれる。烏耳島では旬の海産物がいつでも食べられる。特に、カキは値段も安い、新鮮な旬の水産物であることから老若男女を問わず人気がある。烏耳島船着場に行けば、カキ料理店(別名「カキ小屋」)が左右に並んでいる。ここでは安くて新鮮なカキはもちろん、捕れたての活魚も楽しめる。1階では刺身のネタを話し合って選び、2階には安い値段でご飯とチシャ、魚のアラ鍋を出してくれる店が並んでおり、うまく交渉すればはるかに安くしてもらえる。



美しい夕日 そして烏耳島の夢

黄海の夕日が眺められる展望台の設置は、烏耳島の資源を最大限生かしつつ、人中心の歩行環境を烏耳島の特性に合わせて演出した結果だと評された。ますます具体化していく烏耳島オーシャンフロントへの期待に胸を膨らませ、烏耳島のうっとりする夕日を後にした帰り道、「烏耳島の夢」が耳をくすぐる。

烏耳島の味



食が進む塩辛市場

新鮮な活魚と旬の海産物は、海に面した魚市場ならどこでも味わえる逸品中の逸品。しかし、烏耳島魚市場では一味違ったグルメが楽しめる。いわゆる「ご飯が進むおかず」とされる様々な塩辛がぎっしり並ぶ塩辛市場！味と値段に満足できるのはもちろん、温かい人情まで感じられる烏耳島の塩辛市場、ぜひ一度見て回ろう。

